

2022年7月31日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書9章38～41節

説教題：反対しない者は味方

先日、参議院選挙が行われましたが、こんな話を聞いたことがあります。ある人が、町会議員(か何か)の選挙に立候補しました。選挙運動も全くしなかったそうですが、開票したら3票が入っていました。彼は妻に言いました。「俺とお前と、あと誰が入ってくれたんだろう」。そうしたら妻が言いました。「私はあなたに投票していませんよ」。「妻だけは当然投票するだろう」という彼の心と、妻の心は一つではなかったという話です。しかし、笑ってばかりもいられない話です。「イエス様を信じてクリスチャン生活をしながら、実は私達の心がイエス様と一つではなかった」、そういう時が、私達にも多分にあるのではないのでしょうか。そうでないように、ありたいものです。今日の箇所は「今申し上げたようなこと」を語る箇所です。「聖書の内容」を確認した後、「信仰生活への適用」を考えたいと思います。

1：聖書の内容～信仰の姿勢としての謙虚さと寛容さ

この箇所は、12弟子の1人ヨハネがイエス様に「先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちの仲間ではないので、やめさせました」(38)と言うところから始まります。なぜ、彼がこういうことを言い出したかということ、37節でイエスは「このような幼子たちのひとり、わたしの名のゆえに受け入れるならば…」(37)と言われました。「わたしの名」という言葉を聞いたヨハネは、最近あったことを思い出して、この話をしたのかも知れません。しかしこれは、37節のイエス様の言葉を補足する、良い教材になったのです。

この時、既にイエス様の目は、エルサレムを向いていました。具体的には、まだカペナウムにおられて、ペテロの家に滞在をしておられたようですが、イエス様の関心は、十字架を見据えて弟子達を訓練することに集中していました。この箇所も、イエス様が弟子達に大切なことを教え、訓練しておられる箇所です。そしてそれを「マルコ福音書」が伝えているのは、後にこの箇所を読むクリスチャン達にも、それが大切な事柄だからです。

さて、当時の人々は、精神的な病気も、肉体的な病気も、悪霊の力が働いている、と考えていました。ですから病気を癒すためには、薬も飲ませたでしょうが、悪霊を追い出すためのまじないもしたようです。悪霊を追い出す時の一般的な方法は、悪霊よりも有力な霊的な名前を使って「この人から出て行け」と言うことでした。「悪霊よりも強力な霊的な名前を使うことが出来れば、悪霊はその名前によって打ち負かされるはずだ」と考えたのです。そのようなことが行われていた時代(世界)での出来事です。

ここに登場する「(イエスの名前を)唱えて悪霊を追い出している者」は、イエス様と何の関係もない人だったかも知れませんが、むしろ12弟子のグループには入って来なかったけれど、何らかの形でイエス様を信じていた、それで主の名を使って悪霊を追い出していた、そういう人だったのではないかと思われまます。ヨハネにしてみたら、悪霊の追い出しをイエス様から直々に託されたのは自分達12人だったはず。あの男は、自分達のグループには入らず、イエス様に従うこともせず、ただイエス様の名前を利用している。そういう腹立ちがあったのではないかと思います。ヨハネは、イエス様から「ボアネルゲ(雷の子)」とあだ名をもらった人です。突然カッとなって声を荒げることがあったのかも知れません。彼は「勝手にイエス先生の名前を使うな!」と言ったのではないのでしょうか。そして、当然イエス様も「そんな無免許の者のやっていることは止めさせるべきだ」と思っておられる、と思ったのです。だからここで報告しているのです。ところがイエス様は、思いがけない返事をなさるのです。「やめさせることはありません—『やめさせてはならない』(新共同訳)。わたしの名を唱えて、力あるわざを行ないながら、

すぐあとで、わたしを悪く言える者はないのです。わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です」(39～40)。ヨハネは意外だったと思います。「どうしてですか?」という顔でイエス様の言葉を聞いたことでしょう。(それは私達の疑問でもあります)。イエス様は、弟子に何を教えようとしておられるのでしょうか。

ヨハネが、悪霊の追い出しを止めさせようとした理由は何かという、彼は「私たちの仲間ではないので、やめさせました—{『わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました』(新共同訳)}」(38)と説明しています。「イエス様の名前を使うことが出来るのは、自分達と一緒にになってイエス様について来る者だ」と思っている。しかし、それだけではない。「それがイエス様の御心だ」と、「自分達はイエス様と同じ思いになってやっている」と思っていたのです。そして「イエス様に従って歩いている私達と、イエス様の名前だけを利用しようとするあの連中とは、根本的に違う」と思っていたのです。だからこそ、イエス様の訓練の目的は、彼らのそのような思いを変えることにあったと思います。

確かに彼らは、イエス様に付き従っていました。しかし、ヨハネ自身が思っているほど、弟子達は他の人々と根本的に違うのでしょうか。イエス様は「わたしの名を唱えて、力あるわざを行ないながら、すぐあとで、わたしを悪く言える者はないのです」(39)と言われました。もうすぐ全ての人がイエス様の悪口を言う、イエス様を罵る、それをすでに暗示しておられます。その時、弟子達はイエス様を守るのでしょうか。そうではありません。弟子達もイエス様を裏切るのです。「あんな人は知らない」と言うのです。イエス様を置いて逃げ出すのです。そう考えると、彼ら自身が線を引き分けているほど、彼らと他の人々との本質的な差はない、ということにならないのでしょうか。「(イエスの名前を)唱えて悪霊を追い出している者」(38)がいるとして、その人がどんな形であれイエス様を信じているとして、悪霊が追い出されているのは、聖霊の働きではないのでしょうか。その意味でも、弟子達は、人に対してもそうですが、神の前にも謙遜にならなければならなかったのではないのでしょうか。

遠藤周作が「最後の殉教者」という短編を書いています。江戸幕府が倒れ、明治の世になっても、依然としてキリスト教は禁じられていました。長崎には「隠れキリシタン」という形で村をあげてキリスト教の信仰に生きている人々がいました。ある村に喜助という臆病者がいて、村人は喜助のことを「あの臆病さの故に、役人から捕まるようなことがあれば、すぐに転ぶ(棄教する)かも知れない」と心配していました。実際、村が役人に襲われて、村人が逮捕され、拷問が始まると、喜助は自分の番が来る前に恐れをなして、「信仰を捨てるから助けてくれ」と言って逃げ出して行くのです。一方には、拷問に耐えて信仰を守り通す少数の者もいました。彼らは、やがて長崎から島根県の津和野に流され、そこで拷問に耐えていました。しかし、やがて「何のためにこんなに苦しまなければならないのか。なぜ、神は私達を救ってくれないのか。何のための信仰なのか」、そんな暗い疑問にその人達も襲われ始めます。その時です。そこにあの喜助が連れられて来るのです。「なぜ喜助が?」、彼らは思います。喜助は自分に起こったことを話します。彼は転んだ後、村に帰ることも出来ず、港で惨めに働きながら生きていました。ある時、港で長崎から津和野に送られて行く村人達を見たのです。その時、彼は心に響く声を聞くのです。「お前も彼らの所に行きなさい。転んでいい、また逃げ出してもいいから、とにかく行くだけは行きなさい」。そうして喜助は津和野にやって来て、逮捕されたと言うのです。「何のためにこんなに苦しまなければならないのか」、そう思い始めていた人々は、その話を聞いて「信仰を守り通したことは無駄ではなかった」と思うのです。ポイントは、真つ先に転んだ者、神から一番遠くにいたような者、神はその喜助に働き掛けられ、信仰を強く守っていた人々を励まされたということです。神の声は、他の人の心にも響いたかも知れません。でも、その声に実際に動かされたのは、自分の弱さを自覚していた喜助だったのです。神が誰に働かれるのか、神はどの人に、

どのような目を注いでおられるのか、私達には分からない。そしてその神の声を聞いて、神に用いられて行くのが誰なのか、それも私達には分からない、ということをおぼわされます。その意味でも、私達は謙遜にならざるを得ないのではないのでしょうか。そして、謙遜さの現れとして、人に対して寛容であらねばならないのではないのでしょうか。

そして「謙虚であること、寛容であること」は、彼らがやがて直面する問題とも深い関わりがあるのです。41 節に「あなたがたがキリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません」(41)とあります。初代教会は、誕生して間もなく迫害を経験します。ある人は、信仰のために地域社会を追われ、生活の資を奪われることとなります。その時に「教会には属していない人かも知れない、はっきりと信仰を表明することは出来ない人かも知れない、でもクリスチャン達の労苦を思ってそっと一杯の水を与えてくれる人がいる、一回の食事を出してくれる人がいる」とします。ある牧師が戦時中の経験を書いておられます。「私の父が信仰のために刑務所に入れられている時、ほとんどの教会員は牧師館に寄り付かなくなった。その中で終始変わらず何かと物を届けてくれたのは、ふだんあまり目立たない自転車屋のおかみさんだった」(辻信道)。この「おかみさん」は前から教会に出入りしていた人だったかも知れませんが、いずれにしても、そのようにして慈悲をかけてくれる人がいるとします。その時、クリスチャンは考えるかも知れません。「この人はクリスチャンになっていない人ではないか。その人から助けてもらって良いのか。恥ずかしいことではないのか。御名を汚すことにならないのか」。それは「マルコ福音書」が書かれた頃の教会にとって、現実的なことだったと思います。その時に、彼らの心にイエス様のこの言葉が響いたのではないのでしょうか。「心配する必要はない。私達に逆らわない者は、私達の味方だ。神がその人を祝して下さるから、ただ感謝してその人の好意を受けなさい」。「謙虚さ、寛容さ」は、一切を支配しておられる神の支配の中で「神が用いられる人に助けてもらう謙虚さ」にも繋がって行くことなのです。イエスはその意味でも「キリスト者が謙虚であること」、その現われとして「他の人に対して寛容であること」、その大切さを教えられたのだと思います。そしてその言葉を、「マルコ福音書」は初代教会の人々に、そして私達に伝えてくれたのだと思います。

2：信仰生活への適用～謙遜さを超えて、御心に生きる大切さ

短く信仰生活への適用をお話しします。申し上げた通り、この個所が中心的に教えることは、「謙虚さと寛容さ」です。しかしこの個所には、「謙虚であること、寛容であること」ということから一步進んで「さらに積極的な勧め」があります。

この個所を読む時の素朴な疑問は、「山上の説教」との整合性です。イエスは言われました。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである」(マタイ 7:21)。この言葉と 41 節の「キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける」(41)は、一見矛盾するよう見えます。どう考えれば良いのでしょうか。

「マタイ 7 章 21 節」の言葉は、「御心に生きること、御言葉に従うこと」の大切さが強調されている言葉です。しかし見方を変えれば、「神の御心が地上に行なわれること—(御心が地上に成ること)」の大切さが強調されている言葉であるとも言えます。その観点で 41 節の御言葉を考えた時、イエス様は「『愛』という神の御心が地上に成ることを大事に考えられ、御心が成ることに多くの人に関わることを喜んでおられる」と理解することが出来ます。「神の御心が成ること」に多くの人に関わってくれば、それがイエス様の喜びなのです。ですから、41 節の御言葉を通して私達は改めて、「御心の天に成るごとく、地にも成させ給え—(『神の御心が私を通して地上で行われますように』)」と求めて行くような信仰生活でありたいと教えられるし、そ

うでなければ「主に喜ばれる信仰生活」にはならないのだらうと思います。

そして、御心を行うために大切なことは、私達が主の御心をおもんばかること、御心を写し取ることだと思います。ヨハネは「私の思いは、主の思いと1つだ」と思っていました。ところがイエス様の思いは、ヨハネの思いとは違ったのです。イエス様は、もっと深く考えておられたのです。私達が何かを考える時、何かを言う時、何かをする時、その時に私達が心を砕かなければならないのは、「私の思いの中に主がおられるだらうか」、「私の思いと主の御心は一つだらうか」ということではないでしょうか。

そして、そのためには、普段からとにかく聖書を読み、祈ることではないでしょうか。この個所も—(弟子達の思いとは違った、人間的な思いとは違った)—イエス様の生き方、考え方を教えるために、「マルコ福音書」が書き残してくれたのです。そして私達はイエス様の考え方が分かったのです。普段から貪るように聖書を読み、イエス様はどのようなお方なのか、何を教えて下さったのか、そのことを求め、少しでもイエス様に近づきたいと願うことです。そして、イエス様ならどう考えられるのか、どうされるのか、私の周りに、私を通して御心が成るには、どうすれば良いのか、そんな視点をどこかに持って信仰生活を送ることが出来れば、素晴らしいのではないのでしょうか。結果として、私達の信仰生活は、もっと力強くなり、そしてもっと祝福されるのではないのでしょうか。

3：最後に

今日、2つのことを申しあげました。「エペソ書」に「ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい」(エペソ 5:17)という御言葉があります。「メッセージ訳」という聖書は、「浅はかで思慮に欠けた生き方をしてはなりません。主が願っておられることが理解できているかどうか、よく考えてみなさい」(エペソ 5:17 メッセージ訳)と訳しています。私達は、いつも柔らかい、生き生きとした靈性を保っていたいと願います。そしてその靈性は、具体的には、「謙虚さ、そこから来る寛容さ」、そして何より「神の御心を求め、行おうする信仰の姿勢」、そのような形で現れるのではないのでしょうか。繰り返しますが、謙虚さと寛容さを大事にして、神の御思いと一つになったような、そして御心が私を通して地上に成るような、そんな信仰の歩みをして行きたいと願います。祈りつつ、求めて行きましょう。